

第 91 回定期演奏会 第 1 報

感動の《ミサ曲口短調》, 40 周年記念の会場を満たす

5 月 12 日、石橋メモリアルホールで行われた東京バッハ合唱団の創立 40 周年記念演奏会は、演ずる者・聴く者に呼応する一体感で、大成功を博しました。

演奏前後の客席からのどよめきのような共感と、喜びに輝く表情がステージにも伝わり、バッハの音楽の、終盤にむかってたたみかける高まりは、強いインパクトをすべての人々の胸に与えたのではないのでしょうか。「被造物全体のハーモニーによる讃美」という、アンケート中の表現が、その場の空気を伝えています。

現在の世界にむかって、《ミサ曲口短調》の基幹をなす「地上の平和への切望」と「神の慈愛への全幅の信頼」を、そのまま演奏全体のメッセージとして深く追求したのが、とりわけ（創立 25 周年、30 周年について）3 回目となる今回のミサ曲との取り組み姿勢でした。声楽にも器楽にもその基本方針がゆきとどき、全員の真摯な願いのこめられたステージとなって、これまでにない高みに達したかと思われまます。聴衆からの第 1 報は、すべて「満ち足りた」という思いの感謝のことばだったことに、この日のできごととの真実があるのではないのでしょうか。

早々と公演翌日に届いた、団員の方々への感想を以下に紹介させていただきます。

感想

大野佳代子様より

加藤剛男様ご夫妻へ

昨日は主を讃美するすばらしい“時”をありがとうございました。私たちと一緒にお妹さん（数日前に地上の生を終えられた）も、天使たち皆と喜んでいらっしやる、そんな心地良い演奏でした。

前奏なしでいきなり始まるキリエの導入、グローリア、希望のトランペットの音色、讃美の合唱が重なり、ソロから合唱へ、合唱からソロへ、その流れの美しいこと。私もバッハに夢中になりそうで

す。満ち足りた気分で帰りました。

感想

村上三重子様より

片岡武彦・京子様

今日の演奏会はとても良かったです！私は学問的なことは分からないので「感じた」としか言えないのですが、第 1 声から最後の最後まで、終始、バッハを感じていました。

各声部の音色が、力が抜けていて心地よい響き。それぞれが何をやっているのかとても良く分かり、メリスマがとてもきれい。また演奏会のあるときには声をかけてください。

感想

野口 碩 様より

12 月のときにも少し遅く駆けつけましたので、「（演奏中は）基本的に立って聴いてください」と言われて立っておりましたのに比べると、今回は補助椅子が用意され、私のように開演時間にどうしても伺えない者には大変たすかりました。ご配慮ありがとうございました。

gratias gloria credo のような語を発音するときに、子音をもっと立てないといけないと思いません。透明な響きの支えももう少し美しくなるはず。トランペット、ホルンの演奏みごとでした。

感想

柴田記公子様より

昨日はコンサートにお招きいただきありがとうございました。

教会のなかで聴いているような錯覚に陥るほど、自然で暖かな感じがしました。パイプオルガンとの融合もすばらしく、コ・ラスのバランスもよかったです。歌い方が頑張り過ぎなくて、あのくらいの編成もいいな、と思いました。

あれだけの曲を歌うのは、さぞお疲れになったと思います。パワフルな指揮に感動しました。

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」再考を いま

大村 恵美子

1979年以來、エズラ・ヴォーゲルの発したこの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」なることばを、はじめから一貫して、私は「ばかを言え」という気持ちで軽視していた。ところが、最近アンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』などを読むにつれ、もう一步踏み出して考えてみなくては、という思いが生じてきた。

「『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という大げさな表現が登場して、日本と日本人以外の人々をそれぞれちがった意味で驚かせたのは、1979年になってからのことだ。じっさいには、日本はけっしてナンバーワンになったわけではなく、総合的な経済力でみれば、まだ首位のアメリカに大きく引き離された二位にとどまっていた。」
「日本人も、世界中の他の国の人々もともに、これほど急激で、根本的で、ほとんど予想もつかなかった一連の変化にきちんと対応できるだけの、構造的な準備も、心理的な準備ももちあわせていなかった。」(ジョン・W・ダワー「二つの体制の中の平和と民主主義」、『歴史としての戦後日本』訳書、みすず書房 P.84)

しかも、2002年の現在、これまた予測もつかなかった経済のどん底にあえぐ日本だが、それでもアメリカに次ぐ第2の経済大国であることには変わりはない。アメリカがテロ撲滅戦の世界規模的拡大に血道をあげ、イスラエル・パレスチナの死闘を、EUもアラブ諸国も、遠巻きにしながら何ら有効な行動を起こせずにいるという、恐るべき世界情勢に直面して、日本はどうするのか。

まず、一極突出のアメリカの狂気に、全世界が「ノー」をつきつけなければならない。おそらく、9・11ショックでテロ反対にまとまった国々も、その後のアメリカの理をわきまえぬ、傍若無人の行状を目にして、これはいかんと早くもさと、イラク征伐からはつき合わない、とするものが大勢を占めるだろう。ところがやっとその頃になって、小泉政権はアメリカの軍事行動にフリーハンドに尻尾をふって随従する戦争法案を、今頃やっきになって通そうとしている。

保守政権が、ますますそのアナクロニズムを露骨にうち出している日本だが、ジョン・ダワーの著書などでかえりみると、日本の民衆も、なかなかヨーロッパの人たちのように、弁舌さわやかに反論をかかげ、街頭に大きなデモをくりひろげる、などのパフ

オーマンスはへただが、時と事からによっては、お上の言うことに、グズグズと面従腹背したり、突然効果的な法廷闘争に出たりと、意表をついた拳に出るか、ただ単に鈍重な形で、動じないということもする。こういう半ば無意識かつ善良な民衆の方向感覚を、ダワーは日本の底力として、高く評価しているように思われる。

そこで、私は考える。

国土は豊か、人材は、ユダヤ人をはじめあらゆる民族を自国に招き入れて多彩有能、建国以来何百という対外干渉・侵略に軍事力を行使して最強、つまり並ぶものなき唯一の覇権国がアメリカである。これが「覇権国」としての「ナンバーワン」。

それならば、その次に位置すると見なされる日本は、「非戦国 アズ・ナンバーワン」にはなれるし、今だってなっていることを、自覚しようではないか。私は、日本が民主主義国として、依然として多くの欠点や未熟を呈し、人権だって建前と本音とでたいへんな開きをもった国であることを、百も承知だ。しかし、フランス革命やアメリカ建国などで、人類の理想を高々と謳い上げた先進諸国も、その後現在までにどれほどのあやまちと、野蛮性への回帰をくり返したことだろう。生命を瞬時に奪い去ってしまう核兵器を開発し、それをつねにちらつかせ、後からそれを手に入れようとする国を恫喝し、思い通りに動かない相手は圧倒的な力で抹殺してゆく。

そういう国が世界のナンバーワンであるなら、日本は、それに対抗して、いやがられても構わず、命と体を張ってでも、その行く先きが全人類の消滅であることをハッキリ指摘しつづけて、「サヴァイヴァル=人類生き残り」の「アズ・ナンバーワン」であることを証明してゆくのだ。

これが危険かどうか。アメリカは、純真なところもあって、フェアに主張する相手に意気を感じると、コロリと方針を変えることもしばしばだ。目先の寵愛喪失をおそれて卑屈になることをやめ、サヴァイヴァルの道を、アメリカにも、EUにも、イスラム諸国にも、GDPミニマムの最貧国にも、裏表なく真意を伝えてゆこう。もっともっと口と手を、武器と金なしに、直接手段で使ってゆこう。これが、私の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の再考論である。

最近のメディアでは、唯一の覇権国である「殿(アメリカ)のご乱心」に、歯止めをする者がいない、というため息ばかりが目立つ。ただ困って見ていないで、何とかするのが同時代人である私たちのつとめでしょう。

だから、ジャパン・アズ・ナンバーワン! 自覚しよう!

「バッハ・カンタータ 50 曲選」 出版協力債券 締切り迫る

「バッハ・カンタータ 50 曲選」の今後の円滑な出版をめざして、2 ヶ月前の 3 月 9 日、出版協力債券を発行し始めました。

東京バッハ合唱団の関係者を中心に 700 枚の P R 用ちらしを配り、債券発行数を 700 口、募集期間を来年 12 月末まで、としましたところ、期限よりはるかに早く、わずか 2 ヶ月後の 5 月 9 日現在、600 口をすでに軽く上まわってしまいました。団員、後援会員・団友、一般支持者がほぼ同数の割合で応募してくださったのです。

これからは、無制限にこのご好意をお受けすることもできませんので、次のようなことを考えました。

1. もう 100 口だけ増やして、800 口までとする。
2. 800 口に達した時点で、(2003 年 12 月 31 日の締切りを待たずに) 受け付けを締め切らせていただく。たいへん心苦しいのですが、その後にご送金くださった方には、おわびをして、ご返金させていただくこととなります。
3. 債券ではなく、御寄付は無制限に、ありがたくお受けいたします。

この企画について、当初から、世間的にみて利率(1 口 9,000 円を 2 年後に 10,000 円にしてお返しする)が高すぎるのではないかと、つまり合唱団側の負担が大きすぎるのではないかと、心配してくださる方々もありましたが、債券と並行して、この目的のために寄付しますと、ご送金くださる方も多数いらっしゃり、こちらが準備すべき利息分を相当カヴァーできるほどになり、たいへん感謝しております。

このようにして、「50 曲選」完結まで、という皆様のご熱意のもと、予想外の早さで出版の資金面に困難が遠ざかりました。もうあとは完成に一気に漕ぎつけるだけ。心より厚く御礼申し上げます。

2002 年 5 月 9 日



「千と千尋」の世界

大村 恵美子

「千と千尋の神隠し」を見た。日本のアニメーション映画は、世界的に有名で、とくに宮崎駿の「魔女の宅急便」「となりのトトロ」など、あまりこの方面に詳しくない私でも見ていて、それまでのディズニー・アニメの圧倒的世界制覇から、またひとつ別様のアニメのあり方を、主張しはじめていることを感じる。今度は、ベルリン国際映画祭で、一般の映画のなかで、「千と千尋...」が最優秀賞を獲得したという。

その批評家たちの感想に、「八百よろずの神々の世界」に触れるものがたびたび出てくるが、私は一般に、多神教的アニミズムによって投影されるものは、多様な人間の姿だと思っている。人間が、欲やあれこれのしがらみや、怖れなどによって強くゆがめられ、コントロールの効かない、不気味な生命となると、そこに自己の範疇から超え出して、外から自己をとりかこむ強力な神と感じられ、崇め、なだめ、おそれかきこみ、寵愛を得ようと、とりいれる対象にまで高められてゆくのだろう。

この映画を見た私の印象は、それが、新約聖書の福音書に描かれる世界と、とても似ているというこ

とだった。イエスをとりまく外界から、種々雑多な人間が、イエスをおどし、試み、あるいは勝手にいろいろな要求をつきつけ、懇願し、寄り添い、友情を示したりしながら、実体さえさだかでない異様でぶざまな姿で、または悲しげな、憎めない表情でイエス(この映画では主人公の少女)に接近してくる。こちらがついてゆこうとすれば、その行くては、はかり知れない謎の巷である。

しかし、主人公は、かれらに敵意をぶつけるかわりに、その素性が何であろうと、今ここでかれらとの間に交わすことのできそうな可能性をさぐり、勇敢に対話し、逃げないで、あるときにはかれらの要求にしたがい、あるときにはかれらの困難をともに切りぬけ、それでもなお、自分が抜け出て明かすみに通じる道を、その場その場で知恵のかぎりをつくして、切りひらいてゆく。

そこでは、自分自身も相手も、なんとなくおかしくて、緊急の事態でもなおユーモラスな雰囲気だたよう。しかしまた、文句なく親しかった実の親でも、いったん冒険をひとりで体験したあとでは、はるかに遠く、自己の体験を共有できない存在となっており、孤独をさとするのだ。

勸善懲悪の、色分けの単純な二元的なディズニーの世界からは程遠い、このような宮崎アニメの世界は、イエスをとりまく福音書の物語をほうふつさせるところに、普遍性があり、このたび金熊賞を、ヨーロッパで授けられることとなったのではないだろ

多神教の装いに、好奇心を刺激されてのこと、というような趣味的なものではなく、宮崎監督の大きな人間洞察の視野と、創意の力強さと豊かさに、多くの識者が脱帽したのだと思いたい。

それにしては、偶然の要望から取り入れられたという、エンディングの主題歌は、またもや次元のより低い、淋しげで説教的で思わせぶりなもので、この映画の芯を流れる明かすさ、力強さを象徴するにはお手軽に過ぎるが、より多くの観衆には、自分との距離を縮める手助けをすることになるのかもしれない。

東京バツハ合唱団 活動予定

- 6月24日(月) 18:30 - 20:30 団員総会 (於:目白聖公会)
- 7月1日(月) 18:30 - 20:30 創立40周年記念祝会 (同上)
- 7月21日(日) 10:30 - 12:30 第19回<ばっはめいと>
夏の演奏会 (於:経堂ヤマハミュージック)
- 8月1日(木) - 4日(日) 野尻湖合宿
(於:長野県・野尻湖畔, レイクサイドホテル)
- 8月3日(土) 19:00 - 20:30 野尻湖・神山教会演奏会
- 12月15日(日) 16:00 - 18:00 第92回定期演奏会
(於:石橋メモリアルホール)

下図「ニューズウィーク日本版」(2002年4月3日号)が特集を組んだ。前頁=同誌表紙。



うか。遠い東洋の、原始的な、そしてエスニックな